

自分なりの流儀で本の楽しみを知る

行動する読書は大人の贅沢である

ひたすら読み耽るもよし。小説の舞台を訪ね歩くもよし。読書の楽しみ方は、本好きの数だけ存在する。増え続ける蔵書に喜びつつもあえぎながら、己が読書道を邁進中の岡崎武志さんが語る、「読書の悦楽」とは――？

書評家・古本ライター
岡崎武志

●おかげさまで・たけし 1957年大阪府生まれ。書評中心に各紙誌で執筆活動が続ける。『上京する文学 漱石から春樹まで』（新日本出版社）、『ご家庭にあった本 古本で見る昭和の生活』（筑摩書房）など著作多数。

マンガから本好きへ

書評を仕事にしていることもあって、読書の原体験についてはちょっといいカッコをしたかったのですが、正直に言うと、僕の読書体験の始まりはマンガなんです。記憶の中では、幼稚園か小学校に入っつてすぐのころに読んだ『とんち曾呂利』というマ

ンガが、最初に読んだ本として残っています。

でも、マンガから読書が始まったのはよかつたかもしれません。そのうち近所の古本屋さんで、店頭に置かれた三冊十円のマンガ雑誌の付録マンガを買い漁るようになり、やがて活字の本へと移行していった、小学校の高学年になると図書室に入り浸る毎日。小中高を通じて、お勉強

はできなかつたけれど、本だけはめちゃくちゃ読みました。

気がつけば古本と古本屋巡りが大好きになっていて、その延長で書評を仕事にできるようにもなった。趣味と仕事が一致している僕は大変な幸せ者ですが、その入り口をつくってくれたのはマンガです。いまでも忘れられない光景があります。

家の隣に体育館ほどの広さのスクラップ回収会社の倉庫があつて、そこに古新聞や古雑誌の束が山のよう積まれていたんです。小学校四年生のころから、会社の休業日になるとそこに潜り込んで、マンガや雑誌を探しては読み耽りました。

お尻の下には読み尽くせないほどの膨大な量の本の山。「砂糖壺に落ちたアリ」さながらに、その山に埋もれて至福の時間を過ごしました。思えば、学校の図書室とこの倉庫が、本読み人間としての基礎体力をつけてくれたような気がします。

読書には楽しみ方がいろいろあります。

僕の場合、以前はひたすら読み耽つてその世界に浸るといふ楽しみ方が多かった。

それが変わったのは、東京に出てきてからです。生まれは大阪で一九

九〇年に上京してきたのですが、そこから本を読んで街歩きをするという楽しみ方が加わるようになりました。

街に出始めたのには、本や映画を元に街歩きをした先駆的な存在である評論家の川本三郎さんの影響も大きいですね。

いろいろな作家の上京後の足跡を歩いてたどる「上京する文学」というシリーズの連載が続けていますが、執筆の前に、川本さんの書かれたものを読んで出かけることもあります。ただ、その後で文章を書くとき、文体が川本さんになっちゃうのだけが困るんですけれどね（笑）。

「読んで街歩き」は楽しい

本を読んで東京の街を歩くのはすごく楽しいですよ。

方法として最も簡単なのは作品の舞台となつたところを訪ねるといふもので、これはよくやっています。『読むと行動したくなる本』は、圧倒的に小説です。

たとえば漱石をはじめとした明治・大正時代の作家の本や、昭和文壇の一時代を築いた作家の作品はいまでも読み返しますし、その舞台を訪ねてみるというのは、やっぱり王道の楽しみ方でしょう。

小説の舞台となる場所は東京が圧倒的に多いですから、本を読んだの街歩きも自ずと東京が多くなります。東京オリンピックで街が壊されて明治のころとは風景が変わってしまったているけれど、それでも東京が重ねてきた歴史が、町名や小学校、バス停なんかに残っているところが東京という街のいいところです。

漱石の『三四郎』の舞台となつた